

山上 千鶴子

■序説

精神分析とは何か。それは本来「心の造形」なのだということを、私はずうっと考えてきた。その端緒とは、タヴィストック留学からの帰国後、日本で成人を対象とした心理治療に携わりながら、しばしば暗澹たる思いをしたことにある。そこには、パーソン(個/person)の感覚とかパーソナリティー(人格/personality)の片鱗がまるで見当たらない。即ち、個々人に‘顔’がない、‘目鼻立ち’がない、‘輪郭’を持たないといったこと。実に、‘のっぺらぼう’なのである。そこから、「心の彫琢」ということが私のこだわりとなった。個々の‘人格的主体’なるものの形態を刻り出し、その深奥に潜む、固有の‘本然’を抉り出すことが祈願された。つまりのところ、‘のっぺらぼう’に目鼻立ちが、そして輪郭が顕われる。「(イナイイナイ)バアー」というわけ。

哲学者・西田幾多郎がその著書『芸術と道徳』(1923:P.176)に於いて、こう語っている。<学者は思惟によって新なる真理を知る如く、画家は筆を取ることによって、彫刻家は鑿を取ることによって、新なる実在を知るのである>と・・・。実在(リアリティ)とは「深い我」のこと、生命の根元の謂いだが。われわれ心理臨床家も、無論のことそれに倣う。それで何によってと問われれば、「パロール(語りの言葉)」によってと、そのように答えようではないか。

対象なるものと相対しつつ、その生命を言語造形によって把捉せんとする、私の臨床の場での‘語り’が、そして語られる言葉がいかなる働きを促すのか。その臨床実践の中で、私は自らの‘行為的自己’の働きを見据えてきた。直感的把握、さらにはそれら内容を描写しながら綿密に構成してゆく。と同時に、明らかにそこには私が刻り出さんとする‘心の形’も展望されている。心が言葉によって媒介され、つまりは意識から隔絶されていた‘生感覚’が取り戻されてゆく。活性化されてゆく。生感覚が充足されてゆく。空疎であったり茫漠とした世界の住人が、あの時この時の‘私なるもの’の雑駁な点々がいつしか線となり、それら繋がり故に、彼(彼女)固有のフォルムを持つに至る。そのように、それぞれ‘個性的生命’が心理臨床という場で証(あかし)された。そこから、<心のことば、‘個’を謳う>がいつしか分析家としての私のモットー(信条)となっていった。それぞれの患者らに於いて‘自発自転してゆく生命’、その動き(ムーヴマン)に目を瞞る。さらには、彼らの語る夢が紛れもなく己れ自身を把捉し、各自心の造形思考に弾みが付いてゆくのを実感され、しばしば感興を覚えた。やがて‘自証的覚知’というもの、私のなかで会得されていったと言える。即ち、<人は誰しも自らを証しせんとして生きている>との理解である。その自由意志が擁護され、さらには挺入れされんとする場、それこそが精神分析ではないか、そうした新たな抱負にも繋がっていった。

そのようにして、心理臨床の実践の中で、「生命の原理」をなんとか捉え直そうと私は試み

て来た。その歳月を振り返ると、折々に大きな導きの機縁となった人たちが思い浮かぶ。ここで日本の近代彫刻の流れを担った彫刻家たちにご登場いただき。それを語ってみたい。つまりのところ、このエッセイは、「精神分析的技法とは何か」についての私の覚え書きなのです。これが日々心理臨床に携わり、奮闘なさる臨床家の方々に幾らか刺激になればと願う。

ここで敢えて「心のデッサン(素描)」としたのには理由がある。それは、タヴィストック留学中もそうなのだが、私は臨床セッションの記録を克明に書き綴ることを習慣としてきた。帰国後もそうで、それら記録はかなり厩大な量になる。因みに、彫刻家も画家も素描(デッサン)する。日々の修練として、それを自らに課すのである。彫刻家・高田博厚はこう語る。〈…自分の足が自分に付いている‘証拠’というのがデッサンなんです…〉と。これは意味深い。一枚一枚のデッサン画、そこから対象(素材)に生命の律動感が吹き込まれ、やがて作品として結実する。それは絶対に省いてはならない創作行為なのだ。心理臨床のセッションの記録にしても、実にそれと同じこと。毎回の臨床セッションの「今・ここ」、そしてそれを記録する時間が交叉し、循環してゆく。臨床記録とは、いわば素描(デッサン)画。その一つひとつがあつてこそ、「理解」は刹那的から連携的に拡がり、かつ深まり、その構成がより綿密になってゆく。そうした過程の積み重ねが「心の造形」に至る。さて、それら「心のデッサン」の指標となった理念の幾つかを、これから語ってゆこう。

■心のデッサン造形理念その1;動勢(ムーヴマン)——‘軸心’の探求

彫刻家・高村光太郎が『回想録』(昭和20年)の中で語っている「榮螺(さざえ)」の話というのが減法示唆に富む。ここにその一部を引用しよう。

(…木彫の小作品「榮螺」を彼が制作していた折、それは昭和5年のこと) <5つ位彫り損って、何遍やっても榮螺にならない。実物のモデルを前に置いてやっているが、実に面倒臭くて、形は出来るのであるが、どうしても較べると榮螺らしくない。弱いのである。どうしてもその理由が分からないので、拵え拵えする最後の時に、色々考えて本物を見ていると、貝の中に軸があるのである。一本は前の方、一本は背中の方にあって、それが軸になっていて、持って廻すと滑らかにぐるぐる廻る。貝が育つ時に、その軸が中心になって針が一つずつ殖えて行くということが解った。だからその軸を見つけなければ貝にならない。成程と思って、其処をそういう風に考へながら拵へたら、まるでこれまでのと違ってしっかりして動きのない拠り所が出来た。それで私は、初めてこういうものも人間の身体と同じで動勢(ムーヴマン)を持つといふことが解った。それ迄は引写しばかりで、ムーヴマンの謂れが解らなかつたが、初めて自然の動きを見てのみこまなければならないということを知った。それ以来、私は何を見てもその軸を見ない中には仕事に着手しない。ところがその軸を見つけ出すことは容易ではない。しかし軸は魚にも木の葉にも何にでも存在する。それを間違わずに見つけ出すのは、なかなか大変ではあるが、結局自然の成立ちを考へ、その理法の推測のもとに

物を見て、それに合えばいいし、そうでない時には又見直したりしてやるのである。・・>

ここで高村光太郎は、栄螺の中に「生命の原理」を直観し、そこから「彫刻的リアリティ」を演繹して語っている。彼は、渡欧前の若き頃より美術雑誌に掲載されたロダンの「考える人」を目にして以来、熱烈に彼に心酔し、西洋彫刻の道を歩もうと意を決して留学も果たしたわけで、帰国後には訳編『ロダンの言葉』（大正5年）および『続・ロダンの言葉』（大正9年）を刊行している。ロダンは、「動勢（ムーブマン）」への熱情を真骨頂とした比類なき彫刻家であり、これら訳編の中にも「動勢（ムウヴマン）」という言葉が頻出する。高村光太郎にはそれには十分に馴染みであったはず。彼が訳した「若き芸術家たちに」（遺稿）の中に、ロダンのこんな言葉がある。<・・・形は君たちに向かって突き出たものと思いなさい。一切の生は一つの中心から湧き起こる。やがて芽ぐみそして内から外へと咲き開く。同じように美しい彫刻には、いつでも一つの強い内の衝動を感じる・・>と。ロダンは稀代のデッサン画家でもあった。当時の舞踊家イサドラ・ダンカンの踊る姿態を彼が傍らでデッサンしていたなど、実に愉快ではないか。それらデッサン画のなんとまあ生命の躍動の漲っていること！フォルムは流麗にして、しかも‘軸心’に何らぶれがない！これこそが自然だ！因みに、ロダンは貝殻に熱烈な愛着を抱くことを、一時期彼の個人秘書であったリルケが書き残している。アトリエには、ロダンの蒐集し愛蔵する古代彫刻の断片らとともに貝殻が幾つもディスプレイされていた！リルケは、そこにロダンの芸術の根本になっている要素が啓示されていると深く感銘を覚えている。もっともなことに私などは思う。かくして、日本彫刻の近代を牽引した高村光太郎にロダンの照応関係を見てゆくと実に興味は尽きない。

さて、これらを踏まえて、「精神的リアリティとは何か」ということについて語ってみたい。「生命とは相克（アンタゴニズム）である」と、私は考えている。その形態化を「彫刻的リアリティ」として徹底して追究したのが彫刻家・ロダンであるとしたら、その内なる心（Mind）を形態化せんとして先鞭を付けたのが勿論精神分析家・フロイトであろう。因みに、フロイトの「死の衝動説」だが、彼の地では著名なる精神分析家にすら受け入れられず、殆ど無視されている。誠に愚かしい限りと私には思われる。生命を‘生と死の相克’として掴み取る視座を持たない限り、「精神分析」の疲弊・衰微は必至と考える。生命とは、引力と斥力を働かせる複雑な緊張を孕んだ磁場のようなもので、それらが互いにせめぎあい、ひしめきあって新たな動きと釣り合いを作ってゆく。そのエビデンス（証拠）こそが、例えば高村光太郎の語る「栄螺」の‘軸心’といったことではないのか。因みに、彫刻家・荻原守衛は、帰国の際にロダンの別れの挨拶をしに行った折、饒別の言葉として、彼からこう語られたと回想する。<君はギリシャ、エジプトの傑作にしる、また僕自身の作品にしる、それらを君の手本にしよと思つては駄目だ。仰ぐべき師は至るところに存在している。自然を師として研究すればそれが最善の師ではないか—>と・・・その言葉から推して思うに、自然の森羅万象一つひとつが絶えず、ねじれ、たわみ、拮抗し合う、そうした動勢の内包されている生命なのだ。ロダンは語ってはいないか。

私もまた、日々心理臨床のセッションの中で一人ひとりに固有となる、まさにその動勢(ムーブマン)に立ち会ってきた。それこそが我ら心理臨床家の命綱であり、そこにこそ「精神的リアリティ」は胚胎されるものと信じられる。

禄山・萩原守衛は32歳でその生涯を閉じた。その訃報に接した高村光太郎は、日本の近代彫刻を担うべく力量ある誠実な僚友の夭折を深く悲しんだ。彼の遺した彫刻群はすさまじい生命力を蔵した途轍のないもので、一つひとつに高村光太郎の唱える「生命の戦慄」がうかがわれる。殊にその絶作『女』は圧巻である。まさに彫刻家として真摯にひたむきに己れの‘内なる自然’に従容として殉じた一生だったといえよう。一方で、高村光太郎は、戦時下でアトリエが爆撃で焼け、塑像及び木彫の作品類およびデッサンすべてが消失した。ここで‘ロダンの生命主義の命脈’は尽きたかに見える。だがやがて、当時のアカデミズムに離反し、高村光太郎に私淑した若手の彫刻家たち、本郷新そして柳原義達らによって引き継がれ、命脈は辛うじて保たれてゆくのである。その「彫刻的リアリティ」としての「ラ・ヴィ(生)」、即ち「生命の戦慄」が・・・。

高村光太郎は、当時から後続の若き彫刻家たちの‘精神的支柱’としてあった。『緑色の太陽』を始めとする幾つもの美術評論、それらエクリチュール(書かれた言葉)に於いて彼はむしろ彫刻家としての真面目を遺憾なく発揮している感がある。そして詩作である。彼はいつか対談で<自分の詩は、日記のようなものだから・・・>といくらか謙遜ぎみに語っていたが・・・。決して自分を‘詩人’とは認めていない。飽くまでも‘彫刻家’であると名乗っているわけだ。だが、そこに注目すべきものが多々ある。確かに日々の想いが克明に吐露されているのだが、そればかりではない。父親・高村光雲譲りともいえる生来の律儀さ故なのか、心の内部を凝視し、自己の必然的な運行への信頼に徹底的に賭けている。不可避を敢えて引き受けるといった断固たる確信がある。それが彼にとって美と真実の体験ともなっているわけで。その過程において不断に己れの内側をまさに‘言葉によってデッサンしている’。彼の詩はそうした折々の精神的態度の詩的表白といったふうで、いわゆる「言志の詩」とも言えよう。「心中の物を寫(うつ)すということ」が眼目という、良寛禅師の詩にも似て・・・。ここに精神分析との親和性が窺われはしないか。即ち、心の内部の相克(スツアモンダ)、その吐露だけでは駄目だ。挫かれて、心砕かれたままでは済まされない。そこから活路を拓き、一步踏み出し、己れの本来へと自覚的に繋げてゆく、「贖(あがな)いの行為」への意志こそが希求されるのだから・・・。

この「贖いの器」としての機を有するものとして、高村光太郎の詩の中でもとりわけて、彼の『道程』時代後半の詩の一篇「粘土」(1913)を、私はとても高く評価する。実に116行もの長い詩なのだが、概要してみよう。ある寒い冬の晩、彼は銀座の街中へと繰り出す。やりかけていた「女のトルソ(塑像)」をアトリエに残してきていた。ふいと何やら胸騒ぎがし、アトリエへと急ぎ駆け戻った。<大丈夫、あんなにうまく行ったではないか>と己れの内心の不安と焦慮

を宥め宥めしながら…。粘土を見ながら快心の微笑みを浮かべたときの自分の興奮を密かに反芻したり…。しかしアトリエに戻り、そのやりかけのトルソの白い布を取り外したとき、そこに目にしたのは無惨にも干からびてあちこち剥離し崩れかかった粘土の塊りでしかなかった。背中には大きな亀裂さえあった。そこにあった命漲る自然などもはや見る影もない。彼は完全に打ちのめされ、悄然とした。自然に背かれたような、淋しさが恐ろしさになり、恐ろしさがまたさみしさにかえり、思わず知らず涙がぼろぼろ出た。だが泣きながら、自分の涙が彼自身を怒らせた。アトリエの闇黒の中に悪意を孕む魔物が我がトルソを狙って襲い掛かってくる幻想に一瞬取り憑かれる。壊させてたまるかと、まさに子を守る雌犬のように、彼は粘土をかばった。しばしの時を経て、彼は、やがて観念し心鎮め、籠(へら)を手にして粘土のひび割れの修復に取り掛かるのであった。そこから、次のような詩句が続いてゆく。

僕の指の腹と粘土とがねばり合って、
こねかえされているうちに
僕はある力を感じ出した
僕は粘土と親密だと思え出した
粘土は僕をよろこんで居ると思え出した
僕はひとりでに武者ぶるいした
この哀れなトルソをきつものにしてやる、きつものにしてやる
僕は伸びる、育つ
この粘土をきつと生かしてやる
あの自然をきつと生かしてやる
何処までも追いつめてやる
僕の指は粘土から
自分の使命をふりかえれとささやかれた
僕に生みつけられた仕事は大きいぞとささやかれた
僕はからだ中でむろんそうだと思った
僕はもともと生(いのち)を作らないでは居られない人間なのだ

これ程までに自分を証しすることに於いて苛烈かつ率直であり得るものかと、まずは感動を覚える。そして、実にそうだと、身につまされた。日々心理臨床に携わりながら、我々の内に否応もなしに心の傷痕を引き摺ってしまう。それをずうっと抱えつつ生きねばならない。折々に内なる嘆きの声が漏れ聞える。＜生かせなかった。育てられなかった。何の役にも立たなかった＞などと…。でも高村光太郎はここで自分に言い聞かせるのだ。自分は＜もともと生(いのち)を作らないでは居られない人間なのだ＞と。ここが観念の為所というわけ。私の言葉では「贖い人」の自覚ということになるのか。そのように生まれ付いているとしたら、やるしかないのでは

ないか。そのようにして何度も何度も仕切り直しは続く。崩れそうでも立ち直す。己れの立ち位置を見定める。その為にこそ日々弛まず、「(言葉による)心のデッサン」が必須とされる。

■心のデッサン造形理念その2;肉付け(モドレ)—— ‘面(プラン)’の充溢

ここで彫刻家・高田博厚に登場してもらおう。彼について私はちょっと個人的な思い出がある。それは帰国後数年経た頃だったか、もはや彼の地の事を振り返ることもない日常だった。それが或る日のこと、JR 千駄ヶ谷駅からの帰途、たまたま最寄りの『みずさわ画廊』に立ち寄った。誰かの個展が催されているらしかった。画廊の扉を押して入ってみて、そこに居並ぶブロンズの彫刻群に圧倒された。結構な数で、それらの像はおそらくロマン・ロランやらアランだったろう。とりわけロマン・ロランの首はひととき異彩を放っていた。それが彫刻家・高田博厚との最初の邂逅になる。画廊の室内には‘西欧知性のエスプリ’が充満していた。私は、いつしか混迷の状態に至り、今自分がどこに居るのやら、ここが日本であることすらも失念していた。その空間だけがまさに‘西欧’であった！私は、記憶の闇の帳(とぼり)の向こうに置き忘れてしまっていた何かに突如グイと捉えられたふうに、戸惑いながらも興奮していた。玄関口のテーブルには「ロマン・ロラン友の会」のご案内のチラシが置かれてあって、なるほど日本でもそうした活動があるのかと気持ちが一瞬動いた。だが、鎌倉まで毎月の定例会に通えるはずもないと放念した。若かりし頃に耽溺したロマン・ロランを今更読む余裕もなかったし。でも、まだあの当時高田博厚はご存命だったはずだから、ご縁を得ずに終わったことは口惜しい。それからかなりの歳月を経て、彼の遺品の整理を任されたからということで、『みずさわ画廊』の店主から展示即売会のご案内をいただいた。奥様が大事に愛蔵されていた最後の品々だと聞けば、私の気持ちは動いた。分不相応とも思わず、ともかく画廊に出向いた。そこで「小さなトルソ」のブロンズ像に出会った。何故ともなしにすごく気に入ったし、私の部屋に置いても違和感はなかりうと思ひ、購入した。そのブロンズ像をリュックに入れて背負い、我が家に連れて帰ったときの私の気持ちはひどく微妙だった。それ迄にも高田博厚の著作を図書館で閲覧し、著述家としての彼の力量には感服していたわけで。とにかくヨーロッパの地での知識階層との交流がすごいのだ。ロマン・ロマン、アラン、ルソーなど。圧倒された。何だか畏れ多いようで、気持ちがいくらか臆病にもなる。でも嬉しくてならない！だから、時折指でその「小さなトルソ」をこっそり撫でてみたりするのだ。

それから、さらに嬉しいことがあった。かつて若かりし頃に高田博厚に私淑し薫陶を受けたという方がおいでだ。精神科医の荒川幸生先生とおっしゃって、医者には珍しく(!)大変な教養人でいらっしゃる。その彼が高田博厚から直接貰い受けた素描画がごっそり一束もあるとかで、私にその中から一枚、額入りでお贈りくださった。それを目にした瞬間、例の高村光太郎の「栄螺」の話がそこに重なった。その裸婦像の軸心をグリグリと力強く手探りしているさまが髣髴した。その格闘している彼の指先の痕跡に、ああ、そうなんだと得心できたわけだ。その後、「高田博厚没後30年展」が、【高坂彫刻プロムナード(高田博厚彫刻群)】で有名

な東松山市の高坂図書館で開催されると聞いて、遠路遥々出向いた折の話だが、展示場でテーブルの上に無造作にごっそり置かれてあった裸婦の素描画。その量には恐れ入った。一枚一枚が気魄に満ちていた。因みに、YouTube でも生前録画されたものがあるのでご覧いただける。私もそこから彼についていろいろ知る機会を得た。彼は語っている。モデルさんは常時3人ぐらいいて、彼女らが交代で素描(デッサン)の相手をしてくれる。それぞれ勝手なポーズをさせておいて、一ヶ月に30枚ぐらいは描くとか。大したものだと感じ入った。

高田博厚という方は、北陸生まれで朴訥な風貌だが、その人となりはなかなか肝の据わった、自由闊達で誠に潔い御仁といった印象なのだ。それが、なかなか奥が深い。掴みどころが難しい。彼がこんなことを語っている。<私の場合、肖像を作ると年齢を超えた「一生の顔立ち」がどうしても出て来て、自分ではそれが本当だと思っているのだが。モデルの近親者からはほとんど例外なしに「似てない」と文句が出る・・・>。これって何だか可笑しくなる！それから「大内兵衛の首」を作ったときの話を持ち出し、<人間の顔の表面は年と共に変わるが、一生のものは変わらない。本当を言うと、現在の大内さんが私の作った像に似て来ないといけないんだがと法螺を吹いて、大笑いになったんだ・・・>と語る。これもクスツと笑える。彼の作品に「室町澄子像」というのがあるが、そのモデルご本人のお話もまことに愉快だ。モデルになって一回目、彼女には塑像が自分そっくりに思え、とても感激した。だが、彼は彼女に語る。<ものの形をただ表面的に把えるということは、そんなに難しいことじゃない。これからは澄子さんという人をどう形にするか、あなたの内面をどう彫刻として完成させてゆくか、それに悩むんだから、又来てね・・・>というわけ。この<又来てね>がそれから延々と続き、なんと完成したのは一年後。ようやくブロンズ像となったんだとか！室町さんはそれを見てちょっと怯んだ。迷いのない、まっすぐに前を見てる自分。全然自分に似てない！で、思わず<立派な顔にしてくださいね>と言ったら、彼が<まあ、澄子さんも、20年30年後経ったらこんな顔になりなさいよね>と言ったんだとか！ほんとに愉快だ！だが、ほんとのところ誰にしても、この彼の真意を知ることは難しかろう。或人が語っている。<わが国の彫刻界にあって、かつて高田博厚ほど徹底したヨーロッパ近代精神の具現者はいなかった・・・>と。さらには<高田博厚が一貫して求めたもの、それは「存在」の確かさであった。それは予め在るものではない。・・・ただそれを見出すために自分の中に「存在」を求め、他者の中に「在る」姿を求めたのである>とも・・・。あーあ、と溜め息が出る。この‘ヨーロッパ近代精神’を知らずして精神分析に携わっているということの無謀さ！あちらは滞欧歴27年、それも第二次世界大戦のヨーロッパの激動期を彼の地で生き抜いた人というのだから、とても私などかないっこないわけだが。

ここに今ひとつ、ロマン・ロランが高田博厚について語ったことを書き加えよう。博厚は18歳で上京し、高村光太郎と親交を深め、そこから彫刻家になることを決意する。31歳の折にちょっと1年ばかりのつもりで単身渡仏した。まずはパリへと向かい、友人で留学中だったドイツ文学者・片山敏彦に迎えられ、彼に伴われてスイスのロマン・ロラン邸を訪問している。実は

これ以前に、高村光太郎とも親交の厚かった詩人・尾崎喜八が心酔するロマン・ロランに処女詩集『空と樹木』を贈呈してあったわけだが、その内扉に高田博厚がなんと弱冠22歳で作った彼のブロンズの首の写真が掲載されており、どうやらロマン・ロランはそれがお気に召したらしい。最初の出会いの折、高田博厚の他の彫塑作品の写真をも目にしたようだ。そしてこの訪問から間もなくして、ロランから片山敏彦宛に伝言があった。＜タカタに伝えて欲しい。彼に私の像を作る気はないか？ 私はこの15年間誰にも自分の像を作ることを断ってきたが、彼には作って欲しい。彼は内部を引き出す>との内容だった。さらには＜彼は精神を形づくる本当の芸術家です。彼は指で思索する・・・>と、ロランは後に語っている。これは実に示唆深い。実は、博厚はその幼少時以降、キリスト教徒であった母親から敬虔な信仰の道へと導かれている。つまりのところ、渡欧前から‘近代ヨーロッパ精神’的素養と感性が彼には備わっていた。そのことがロマン・ロランに見抜かれていたと言えはしないか。「内部を引き出す」など、普通日本人の感覚ではとてもとても及び難いわけで・・・。

さて、話を本来の「心のデッサン」論に戻そう。ここでは「肉付け(モデル)」について語るつもりでいたわけだが、そのテーマが彫刻家・高田博厚にどのように関連するか。どちらかというところ、饒舌なる彼の語りの中から、どのような真意を汲み取れるだろうか。あちらは「彫刻的リアリティ」の徹底追究であることを踏まえると、こちらは「精神分析的リアリティ」の徹底追究になるわけだが。まさにそれらの行為レベルに於いて、実に高田博厚の語りの一つひとつが示唆的で、そのままそっくり精神分析に照応して重なるように私には思われてならない。例えば、【室町澄子像】を完成させるのに一年も掛かったなど、つまりそれって、どういうこと？！おそらく毎回毎回モデルを前に、チョコチョコと箸で粘土をいじっていたのだろう。塑像にちょっと付け足し厚みを作るやら削り取るやらして・・・でも確かに、考えてみれば私たち心理臨床家だって、一人ひとりの患者相手にかかなりの歳月を掛けて向かい合うのを習慣としているわけだ。つまりは、そのようにして彫刻家もまたその心の内奥で対話を試みているのだろう。対話している相手とは、今・このその人ばかりではない、過去に生きてきたその人であり、未来に於いていつか生きるであろうその人であったり・・・その「見えざるもの」、彼の心が内に映す相手を相手にしながら、その都度、それ自身の内部から押し出る力を捉まえ、それがどう「形」を得、そして「形」に成るものか、つまり触知し得る「存在」となるのを待ちながら、彼は指先でとことん格闘してゆく。それで、どこら辺でこれでもう終わりだって思われるのですかと訊かれて、＜結局のところ、もう力尽きて・・・だねえ＞とおっしゃった。その羞じらいを含んだ笑みに幾らか無念がうかがわれる。一つひとつ肖像作品が仕上がるたびに、きっと心の内で苦い挫折感を噛み締めることがおありなのだろう。事実、これ迄に彼自ら手掛けた、どれほどの数の塑像が壊されてきたことか！ロマン・ロランに「思索する指」と絶賛された高田博厚にしてすらも、それほどに「存在」のリアリティ(本質)なるものはなかなか及び難く深淵だということなのだろう。そう言えば、フロイトも「終わりなき分析」と言っただけではなかったか。確かに、とことん＜解ったから、もういい・・・＞などと言えやしない。ただひたすら追い求めんとするものを心の底で凝視してゆく。

私にしても実にそう。＜分析セッションとは、転移と逆転移が切り結ばれる場である＞というのが私の持論だが。私は分析家として日々のセッションの中で、心に浮かぶ「連想」に専念する。絶えず私の‘目’は心の内で手探りしながら、それを追いかけている。またその都度「発話行為（語りの言葉）」によって、さらに相手からも手繰り寄せてゆく、その想いやら連想やらを…。これである！美術評論家の土方定一氏がこんなことを語っている。＜彫刻家は自己の彫刻家としての精神と肉体との総てを賭けねばならない。そのことによって、対象の真実がほんとうに、その彫刻家のものとして人間化されることになるわけである＞と。これって、精神分析家に於いてだって同様と言えはしないか。対象（分析患者）を人間化しない分析家など断じてあってはなるまい。究極のところ、「非人格化（de-personalization）」だったり、そして「没個性化（de-individuation）」、それこそが我々の闘う‘敵’なるものなのだから…。

ここで敢えて「‘面（プラン）’の充溢」という副題を付けたのには、理由がある。分析セッションが唯の表層的な辻褃合わせで終わることもあろう。だが、それは平板でつまらない。心の形とは、内部から押し出される力の顕在化ということではなくてはならない。つまり、そこに「ラ・ヴィ（生）」を感じ取ろうとすれば、面（プラン）が構成的な拡がりにおいて豊饒となり、それに応じて動勢（ムーブマン）が勢いづいてゆくことが望まれる。そこに、個々の存在のリアリティ（本質／存在感）の深まりが希求されてゆく。ここで「自由連想」を敢えて重視するのは、イメージ（心象）を照射することで、彼（彼女）の心の秘められた内側の闇（無明）に光が与えられ、そこから無媒介のままに心の内奥に沈殿したままの己れの何かが目覚め、自覚の内に把捉される。それが生き生きした生命との深い関係にも繋がってゆく。そこに積極的な意味を付与しているからなのだ。即ち、「アテンション（関心／興味）」を向けることに於いて自由自在にして、むしろ果敢であろうとする理由ともなる。分析家がいかなる意味でも窮屈であってはなるまい。

彫刻家・本郷新がその著書『彫刻の美』（P.64）の中でこう語っている。＜肉付けのうまみ一つで彫刻は味わいを深める。肉付けが生きていないと、彫刻も、電柱のように、ものを言わなくなる。彫刻は肉付けによって、いろいろな物語を人に聞かせる。怒りを静めたり、よろこびを伝えたりする。肉付けがあるから、人が触ってみたいもなり、気持ちのよい盛りあがりの変化が感じられると、いっそう嬉しくもなるのである＞と…。これを、精神分析の場合のいわゆる「解釈」と比較してみるがいい。実に含蓄のある言葉だ。「分析的解釈」というものを、思い切ったパーソナルな（！）‘味付け’やら‘色付け’として捉えてみたい。

■心のデッサン造形理念その3：照応（コレスポンド）——‘内部生命’との交わり

いろいろと読み漁ってゆく中に、或る方の『朝倉彫塑館』を訪れた折の談話が載っていて、興味を引かれた。館内にずらっと居並ぶ肖像彫刻を眺めながら、一つひとつ、その作品が実際に実物を目の前にしながら制作されたものか、或いはその本人の写真を見ながら制作されたものか、生前の彫刻家・朝倉文夫をよく知る直弟子の一人に尋ねながら見て回ったんだと

か。それがどっちなのか、十中八九(彼の勤は)当たったと語っていた。それが妙に私の心に引っ掛かった。見る人が見れば分かるにしても、何がその違いになるのか。そこでふと思った。彫刻家とその素材となる対象の間の「照応(コレスポンド)」の有無がその決め手ではなからうか。即ち、美術評論家・土方定一の言うところの<人間化>である。実物と対峙せずに、写真だけで拵えた肖像彫刻には、対象の真実が、その彫刻家のものとして人間化されている痕跡を認められないといったこと。この話は、その実証とも言えはしないか。誠に示唆深い。

因みに、ここで改めて彫刻家・高田博厚に戻りたい。彼がかつて室町澄子嬢に語ったという<..20年30年後経ったら、澄子さんも、こんな顔におなりなさいよね>との言葉は決して‘はったり’などではない。彼の名誉のためにもこれは言っておかねばなるまい。彼が弱冠22歳のとき制作した「尾崎喜八の首」のブロンズ像だが。その写真をWEBサイト【詩人尾崎喜八】の参考資料の中に見つけたとき、私は心底驚いた。ロダン流のその肉付けの腕前などなかなか大したもの、とても一介の無名な若造の手掛けた作品とは思えない。しかも、その尾崎喜八の顔はというと、確かその制作当時、彼は30歳だったろう。ところが、どう見ても、いかにも老成した風な趣きなのである。尾崎喜八がその後の20年30年戦災を潜り抜けて、どれほどの苦難を凌いだことか、そして彼が心の内に悲傷と寂寥を抱えながらも、尚も‘清冽な魂’のままであることを、その‘首’は物語っていた！もう凄いとしか言いようがない！ここに、まさしく高田博厚の内奥で‘人間化されている’尾崎喜八の「存在」があった！彼の肖像彫刻の特徴ともいえる「リリカルな知性美」の顕れが、その萌芽がもうここに窺われる！

この「照応(コレスポンド)」という言葉は、あまり耳慣れないものだが。高村光太郎は尾崎喜八、片山敏彦らと《ロマン・ロランの會》を創立しており、その当時(大正14年)、あの周辺ではよく使われた言葉である。「魂の交わり」と、私は訳したい。人格が人格を互いに照らし、映し合うといったこと。「セレニテ」という言葉もそう。それは精神的深さを含み得る、あるいは含んでいる‘明るさ’なんだとか。<セレニテ(明澄)という語は、あの当時から私たちには一つの合言葉であった..>とドイツ文学者・片山敏彦は語っている。とにかくあの大正期の‘ロマン・ロラン旋風’が巻き起こした、精神圏の醸し出す熱気は凄まじい。誰しも皆それぞれに近代の夜明けに呼応し、己れの才能に賭け、その本道を探り当てようと、運命に悶えながらも懸命に生きていた。だからこそ、人との出逢いに真摯に熱情を傾けた時代でもあった。

さて、ここに尾崎喜八の一篇の詩・『友』を一部抜粋して載せる。詩集『旅と滞在』(昭和8年—13年)中に掲載され、最後に<高村光太郎君に>と添えられている。彼ら二人が連れ立って、或る六月、上越の山旅をした折の感慨を振り返り、喜八が書き留めたもの。

今、旅から帰って、生活と仕事とに、
全く新しい一歩を踏み出さうとしながら、

わたしは遠ざかった山々の父らしい合図を心に聴く。
しかし今日は立ちどまって君を思ふ、至愛の友よ。

君の存在と共に結局はいつか亡びるもの、
君に属するものの中で最も脆(もろ)いはかない部分、
そしておそらくは最も美しい部分、
君の此の世の姿と、雰囲気と、その生活法(ファソン)とをわたしは見た。

生命を形に托(たく)す君の仕事は
それ自身ひとつの永遠を生きるだろう。
それはいい。しかし君の存在の夏の虹(にじ)、
生活そのものである傑作を幾人の者が記憶するか。

その美の脆いことが時にわたしを涙ぐませた。
しかしその脆い美がわたしに一層深く君を愛させた。
友よ、わたしは君の「人間」のにほひに触れた、
あそこで、あの折れ重なる山々の間で。

なんとまあ、これは何だろ！私はこの詩を読みながら、胸に熱い嗚咽が込み上げた。「友情の哀歌」、それも旅でこそわけても結ばれる心の機縁といったふうに喜八自身は語っているが。確かに！誠に人が人を‘知る’ということ、その心の靈妙な調べを聴いたかのような気がした。この時、光太郎は46歳、喜八は37歳で、まだまだこれからそれぞれ各自に固有な運命を紡いでゆかねばならなかったわけで。おそらくは、この詩を解説しようとしても無理だろう。彼自身にしたって、そう。ただ、わが心底に映った他者の影を独り抱きしめて生きてゆくばかり。やがて光太郎は亡くなり、<半世紀前の私の物した友情の哀歌が結局は現実となって、我々に親しかった高村さんの「人間のにおい」が一片の煙と消え、鳴りやんだ歌の余韻のみが残されているという事実が眼前となった悲しみである・・>と、喜八は述懐している。

私は何やら愕然とした。こんなふうに私は人を‘知る’ことなどあったろうか、と胸が衝かれた。確かに<分析セッションとは転移と逆転移とが切り結ぶ場である>と、分析家の私はそれを信条とし、それで良しとしてきた。十分(enough)とは言えないにしても・・。たとえ十分でない(not enough)としても、その都度与えられるものしか与えられないのだからと自らを慰めてきた。それを職業的規律(discipline)と心得て・・。それで、窮屈に安全圏にとどまってそこから一歩も出ようとしてこなかったのかしら。内心忸怩たるものがある。だがここで、高村光太郎の詩で、「猛獣時代」の「偶作十五」の一つがふと心を過ぎった。ちょっぴりほんわりとし、今一度‘樂觀’が息づいた。ああ、ほんとにこの感覚だわ！‘いのち’と出逢ったことの嬉しさが蘇った！

木を彫ると心があたたかくなる。

自分が何かの形になるのを、

木は喜んでいるやうだ。

これこそが「照応(コレスポンド)」の真髄だと言っていい。「生命」を信じられること。人を「知る」ことには、まばゆいばかりの‘美’があるとも。そこからまなざしを背けてはなるまい。悲観も自虐も無益でしかないのだから。さらにここにもう一篇、光太郎の詩を捧げよう。<いのちあるものを見るのは無限にたのしい。いのちあるものは無限にかなしい・・>。何という励ましか！これを支えにして、われわれは尚も精神分析への‘信(faith)’を抱き続けてまいりたい。

■結び

クライン派のはずの私が、このように精神分析的技法についての覚えを書き綴るにあたって、日本の彫刻家ら及び詩人らから援用を得ることに、違和感を覚える方もおいででしょう。実のところ、ここでの狙いとは、「概念くだき」なのであります。つまりクライン派精神分析理論というものを「概念」ではなく「実感」で語りたいというのが私の念願でした。勿論それは日本の心理臨床の場に根付いていなくてはなりません。その意味で、精神分析の‘土着化’といえ言えなくもないでしょうが。当然ながら、極力「普遍化」を志したつもりでもあります。とにかく‘信’を持ちたい。そう願う中で培われた、心理臨床の‘場’に於ける「精神分析的言語」こそ語られねばなりません。それをここで語ったつもりです。

最後に、私の中ではクライン派との絆は尚も顕在であることをここに記しておこうと思います。例えば、マーガレット・ラスティンその人です。私が既に和訳してアップしてあります彼女の論文をご覧ください。【タヴィストックからの贈り物】のページであります。例えば、彼女は、《子どもの診断;セラピーへの適性とは何か》に於いて、<子どもにまずは‘私のところを経験させてあげられること’が肝腎なのです>とおっしゃってます(1982-P.9 参照)。さらには、《マーサ・ハリスへの哀悼》(1987-P.5 参照)に於いては、Mrs. マーサ・ハリスを懐かしく回顧しながら、<彼女は私たち研修生一人ひとりの内に秘するところの‘創造的な火花(the creative spark)’との接触を図ってくださいました>と語っておられます。また、《乳幼児観察のガイドライン～児童心理臨床に備えて》(1988-P.2 参照)に於いては、ビオンの唱える「‘経験’から学ぶこと」を引き合いに、ここでの‘学び’とは、聖書にもある「知ること(knowing)」にも似た、何事もしくは誰かしらの中核およびエッセンスに直接触れ得るような、つまり情動的な深みに根ざしたところの「知(knowledge)」の形態といったものなのだと指摘しておいでです。それらは、言うなればここで私が語ってまいりました「分析患者との‘照応関係’を生きる」といった意味での実践論でもあるということを、ここで留意されたい。 <2020/10/25 記>

【附・折ふしの記】 —心理臨床に於ける「心のデッサン」帖—

■事例デッサンNO. 1.(1984/1/19);

その心の主調音は怯え。若かりし頃にかつて憧れた導き手に見切りを付けられたという苦々しい恨みの情をひきずり、いつか又きつと誰かに見切りを付けられはしまいかと、いわばトラウマに固執する。自分の‘声’が、誰にも届かないもどかしさ、そして諦め。だからか、相手に自分を伝えるべき己れの‘声’が何故か空回りし、途中で漏れてしまう。あるいは掻き消されてしまう。障害物・障壁が、絶えず立ちはだかっているような…。或いは、誰もが、自分にそっぽ向いている、あるいは‘聴く耳’を持たない、といった被害感情を募らせる。つまり、対象の自分への背信・裏切りの予感が圧倒的に支配的。対象は、‘石仏’のように通じ合いを拒む頑な存在か、あるいはシー・スルーのように筒抜けで手応えのない存在かのどちらか。いずれにしても<我関知せず！>とまともには取り合われず、又顧みられずといった点では同じこと。そして最後は、虚無の中に一人取り残されて、‘迷子’になるばかり。退却、もしくは‘逃げ道探し’。それでも、己れの「存在の無意味さ」からは逃れようがない。ここから苦々しさの悪循環が…！

「いいオッパイ&悪いオッパイ」の区別の曖昧さ。‘支配欲’が優勢。母親の乳房の一つを吸いながら、もう片方をも手でしっかり握っていたという幼児期の記憶があるんだとか。自分の管理下に置かない限り、つまり目を離すと、誰かが(?!)それを穢すのではないかという不安感。即ち、自分の統制下にあるのが「いいオッパイ」で、統制から外れたものは「悪いオッパイ」というわけ。→そこには、置いてきぼりを食わした「悪いオッパイ」への報復感がうかがわれる。侮蔑混じりに<‘クソ塗れのオッパイ’なんか、要るもんか！>といった解決策。無用のものとして却下。→喪失感の欠如。

「去勢」のテーマ。己れの不遜・尊大さ、或いは‘要求がましさ’の枷あり。それも‘牙を抜くこと’で一件落着。→‘人畜無害’の仮面、<不肖の息子>というレッテルを身に付けたまま。疎外感を逆手に、も抜けの殻の内へと滑り込む。→共感の欠如。〔引例：勤務先の病院の同僚の医師が発狂。冷淡な反応しか示せず。同情を感じない。〕‘要求がましさ’の自他におけるすり替え、そして否認。→病院臨床に於いて、患者(特に重症の慢性的分裂病者)が、医療従事者の自分に依頼心を向け、あれこれと要望を突き付けてくる限り、医師である建前、己れの‘要求がましさ’は棚上げのまま。つまり自分は奉仕者でしかなく、無欲・無私を標榜できるというわけ。→規律あるいは判断の基準の欠如。→混沌とした無秩序。→無力感・無能感。

セルフ・イメージについての見解。＜変に他人に塗り変えられるぐらいなら、真っ白けなままでいい・・・＞という自己愛の論理が優勢とか。手出し無用。それで自分は、丸ごと自分のものというわけ。そして、自分だけが、チャカリ‘いい役回り’をしちゃうみたいな印象あり。要は、＜誰かとご一緒出来た！＞といった喜びを拵げてゆくことが課題であろうが。さてさて・・・。

■事例デッサンNo. 2.(1986/4/22)；

(内・外いずれに於いても)自分が保有している‘良いもの’が取り上げられはしないかの不安感、そして＜大丈夫無くなりはしない＞といった保証の希求が強く心を占めている。「満腹感・自足」が脅かされる不安あり、或いはそうなることをどこかで絶えず警戒しているといった具合。物腰は慇懃で、外見的な慎み深さ、＜幾らでも我慢します。待ちます・・・＞という姿勢を保持。でも内心半信半疑で、‘お預け’喰らう予感に怯える。本来的に根強い「あやかり思想」が垣間見られる。それを越えられない悩みか。因みに、その経歴からうかがうに、殆ど大概の著名な臨床家の研修サークルに顔を出している。そして、どれもこれも一時の‘お飾り’にして終わった嫌いあり。いわば‘張り子人形’。どこでも誰に対しても結局、師弟関係は深入りに至らず、体のよい‘敵前逃亡’の感あり。‘宿り木’的存在。→自分の‘根’の不確かさ。「権限」の所有への疑問視。それでいて、いつか自分にそれが譲与されることを当然視している。＜誰に何にどう自分があやかっているのか＞をきちんと押える必要あり。「当てにされる自分」については、果してそれはハンデ(災い)か、あるいはメリット(幸運)かの見極めの必要もあろう。どうであれば、‘座りのいい’自分を見いだすことになるのか。名だたる神社の宮司であった祖父の威光を背負っていて、生まれながら「特別枠の人」。だが正直なところ内心は‘普通’に憧れている(!)。だが、‘特別’も手離せない。だから妙に落ち着かない。それで、どういう差し障り(外的並びに内的な)を予感しているのか。このまま「神道」と「精神分析」の‘両刀遣い’で行くとして、それも結局どっち付かずで先細りしてゆかないとも限らないだろう。いずれにしても、自分がいつか将来確実に‘何者かSomebody’にならねばならないといったことらしい。結構これ辛い！

「過剰な摂り込み(excessive introjective-identification)」が問われている。→＜私が私以上のものになる、つまりは私でなくなる＞ということではないか。→‘私の破綻’(風船玉が破裂して萎む具合に・・・)。つまりは、摂り込んだ内的対象が、彼に隷属を強いる‘専制君主’にも似た色調に彩られる。生き残りの策としては、それに迎合し、寄生(帰依)し、つまりそれに‘あやかり’、「共棲関係」を維持することになるだろうが。それを忌避せんとするなら、おそらくは取っ替え引っ替え内的(及び外的)対象を放逐してゆくしかなかろう。→当然の帰結として、「私なるもの’の空洞化・形骸化」に帰着する。さてさて、ここに打開策などあろうかしら。

■事例デッサンNo. 3.(1987/5/6);

＜自分は一人で大きくなった＞という自恃意識が彼の唯一の拠りどころ。その一方で、指導者を求めて、あちこち‘放浪’。しかしそれも、かつての家庭教師との関係にも似て、勉強を教えてくれる誰かという便宜的な利用でしかなく、解らないことが解ったら、後は用済みといった関係の始末の付け方が顕著。関係性に於ける‘育まれる’とか‘育む’とかいった視点が欠落している。そうした「親なるもの」としての姿勢の構えが盲点だとしたら、おそらくそれこそ精神療法医としての彼の将来の問題点になろうか。

彼の人間関係は得てして「有能であること」の品評会になりがち。それで、自分の存在の証明の為、優位性の確保の為だけに相手に利用価値があるとする。この疾しさが内心密かに彼を悩ます。→そこで今度は、誰かを肩代わりする自分となって、おんぶしたり抱っこしなくてはならない羽目に陥るというわけ。そして逃げられない、降りられないということか。→見せ掛けのパフォーマンス。「ふり」だけが横行。真の協調が阻まれている。「見掛け倒し」の懸念。ここでの教育分析体験も或る意味、一つの小手調べ。←本番は、おそらくいつか留学先でになるといった目論見あり。

取り敢えず、当分の狙いは「模範解答集」。しかしながら、対象が簡単に‘底を付く’という危惧あり。究極の理想は、自らの全知全能、つまり自給自足態勢。‘食いはぐれる’とか‘貰いそこねる’を否定。全面的な依存・依頼心の否認。それ‘ナシ’でも自分はやってゆけるという「偽の傲慢さ」。→人間性への懷疑。帰属意識の否認→己れの位置付けの不安。〔引例：休暇明けの夢；クー・クラックス・クラン(KKK)が哄笑を残して、車で去ってゆく。見捨てられた気分。〕(Mrs.クライン、つまり私との関連か?)どうやら夢の背景には、対象の脱価値化。つまりのところ、廃れた使い古しとか燃え滓とかなんて、見向きもしない。こっちこそ願い下げだといった態度がうかがわれる。「主流」へのあこがれと反撥と…。だが、自分の「値打ち」への疑念は深い。どこでどこ迄通用する自分なのか…。と。

「疑似的な平等(対等)」といったことに固執。すなわち、「差異」の潰し合い。有利な人と不利な人との疎外し合う関係性には眼つぶる。勝つことも不安、負けるのも不安。他者の内なる「傲慢」へ向けての敵視も顕著。＜(おまえなんか)大したことはないじゃないか！＞と却下したいわけ。←相手が勝っても、＜勝った勝った…！＞など言わせない！まるで、「モグラ叩きゲーム」みたいな…。→「自己肯定(私はこれでいい!)」の否認あり。＜俺は大したものだ、えらいんだ！＞と決して思ってはならないというわけか。自分が1番、その先がない怖さ。→対象の無能化(影の薄い存在にしてしまうこと)への危惧。サジを

投げられることの怖さ。→締め出される怖さ。誰かの注目の視線（見守られたい！）の確保が希求される。因みに、「皆同じ」に固執したとしても、そこには、「人それぞれ違っていい」が盲点。そして、「それぞれの事情」にも無頓着。ここから「皆と一緒に」へ向けて、力を貸す・借りる、相互的にあげる・もらうなど、人との繋がりの是正が問われてゆく。

■事例デッサンNo. 4.(1988/10/4)；

成り行き任せで、場当りの。貪欲だが、食細い。過去が‘黒い固まり’みたいで、茫漠とした印象。「知らぬが仏」への逃げが顕著。‘知らぬが相手のため・’という言い逃れ。「知る権利」は曖昧なまま。同時に、職務上「知る権限」すら充分使えていない。→負け戦。知りたい・知らねばならぬといった意志が問われよう。これ迄も女性とうまくゆかない。別れ方がいつも同じパターンで、親しくなると厭になる。自分の方から潰した。うまく説明できない。そこには自分でコントロールができないものがあるんだとか。

人の眼（黒目）（不信感を向けられること・疑われること）に耐えられない。それで、白眼→明き盲（即ち盲目的な愛）へ逃げ込むのか。第三者的な立場（二者関係から排除された位置）に耐えられない。そこで、まるで‘粗大ゴミ’扱ひされたという自己憐憫だけが残るといったこと。甘い（苦い）感傷への逃げ込み。相手が自分の持っているものを持っていないと、同情し憐れむが、その相手に自分のナイものを認めると、同情も憐憫も腰砕けになったんだとか。

<誰かが何とかしてくれる筈>の居直りが顕著。「借り物」への‘寄生’。すなわち、誰かがその都度彼にあれこれ貼ってくれる‘そのもの’に為りすますというわけ。ここで、注意（アテンション）の向け方・割り振り方が問われよう。自分がその気になれば、相手が自分のものになるという前提（自慰的幻想）への固執。善意の固まりのフリやら思わせぶりの空回り。だが、相手の事情には無頓着というわけ。

この彼の‘寄生癖’。元を辿れば、わが子に対する卑屈さ・後ろめたさを内心抱く母親の‘弱み’に彼が付け込んだものと想像される。→相互的「理想化（良い母と良い子）」。それを破綻させることでしか、彼の「自立」は望めなかったわけ。‘悪い子ぶる’ことでの離反。だが根本的には尚、「自己懷疑能力」に欠陥あり。

そもそもは、母親の‘愛’に見せかけたナルシシズムもしくは‘依頼心’への反撥があり、そこから自分が脅かされず言いなりになるまいとして、敢えて自分を「使いものにならん！」

とむしろ諦められることを目指したのではなかったか。‘食い散らかし’の数々。しかしその結果、どこかしら自分が「宝の持ち腐れ」になっているといったような不全感あり。＜本当はあるんだぞ！＞の見せびらかしと、いざとなれば＜ないフリ＞して出し惜しみするのが奇妙にも交錯している。己れの「ナルシズム」こそが厄介極まりない、己れの‘敵’とも言えよう。

■事例デッサンNo. 5.(1991/10/1)；

どうにも不可解な印象あり。どうして彼女は、手元にアルもので十分として間に合わすことをしないのだろうか。どうして目の前にアルものをアルとして喜べないのか。ナイナイといつもごねていたいからか。さらには、‘アル’ものを目の前にしても‘ナイ’ものにして使わずじまい。それって、自分側の‘貰い過ぎ’への牽制なのだろうか。

その一方で、己れの妄想、即ち「ナイがアルになる」やら「アルがナイになる」といった呪術能力の過信が気になる点。潜在していた攻撃性(呪詛)が顕在化した事実、即ち小5の弟が小児(喉頭)癌で死亡したことを巡って、悪魔的な自己過信が取り憑いたとでも言うわけか。それへの拮抗作用として、日々、自分の能力の限界を目の当りにしなくてはならないとは・・・彼女の背負っているものが重い。だが、そのこと自体には愚痴らない。鬱的に落ち込んでもない。そもそも重度身体障害者の夫との結婚は、親たちの‘自己愛’を粉砕する思惑があったわけで。つまり娘が自分たちの思う通りにはならないということを親たちに思い知らせんがための・・・！自分で何でも舵取りしてきたという自負と、自分は誰かのご都合主義に翻弄された傀儡でしかないのかという疑心暗鬼で右往左往。自分を預けていい誰かが欲しい。でもその誰かに自分が‘食物にされる’恐れで腰が引けちゃう。自己の「主体性(存在意志)」とは、本来誰のものか。依頼心と自立心とが(自分のも相手のも)錯綜し、ゴツマゼ。勝って嬉しい、負けて嬉しい、どっちの私がいるのかしら。

誰か(何か)を誰かと分かち合うことが往々にして内的脅かしとなる。←自分が‘要らない、用の無い者’にされるという不安感。だけど、もし誰も要らない、お役後免とクビにすれば、唯一人残った私が総てどの役も引き受けざるを得ないわけで。ここが思案のしどころ。共感能力の欠如という点からして、誰かと同じ立場に立って物を言うことが自分には出来ないと薄々承知していて、だから同盟とか連帯から排除されるしかない自分を無意識に予知している。しかし「自分が見捨てられている」といった疎外感承服できるものではないわけで、「重度身体障害者の夫」は、自分から背を向けるかも知れない世間との‘鏝(かすがい)’の意味にもなっていないか。介護の支援体制との絡みで、「お役後免」で放置していた、大して能の無い筈の人達が各自役割を与えられる。つまり私だけでなく、

「皆と一緒に」が出来ているわけで。これって悪くない。結構帳尻は合ってるとも言えそう。

「偏愛」なるものを敵視する癖がある。つまり‘貰い過ぎ’もダメ、‘あげ過ぎ’もダメというわけ。そのバランスを絶えず矯正せんとしているのだが、それも「一番わたしがたくさん欲しい！」との板挟み。「死んだ弟」の存在が宙に浮いたままで扱いかねて、手づかずのまま。どういう位置に彼を据えれば、自分が侵蝕されたと思わなくとも済むのかしら。その思案の持て余しが、あちこちの彼女の関係に波及しているようだ。一方に偏ると、もう片方へとそれ相応の反動が必ずや起きるのは一体なぜなんだろう。不可思議！

■事例デッサンNo. 6.(1992/6/16)；

己れの見た夢を彼が語るのを聴いていると、「経験内容」が総て自分に向けられて収斂されてゆくのではなくて、逆に自分との繋がりから逸れる恰好で経験される(素通りする)といった「思考の倒錯」が、漠然とではあるが、推察される。恰もくこれは誰？ポクじゃない！これは何？ポクじゃない！>といった具合…。自分を云々するということは、他人から見た自分が云々されるといった思考回路網を経なくてはならないわけで。彼の自覚症状・「視線恐怖」とは、確かにまさにそこが断たれており、総ての事象が自分とは関わりなしに空回りしてゆくのが、その運命なのか。思考の遮断(結果は、相手に‘目潰し’を・自分は‘明き盲’に)の手だてとしては、自分を肩代わりしてくれる筈の人物を多く登場させ、そこに巧妙に潜り込んで、自らの正体をくらましているかの如き印象あり。いつだったか、どこかで彼に付いて誰かが「得体の知れない人物」といった評をしていたとか。さもありません！

彼の「視線恐怖」には、誰が誰に何をあげてるのか、誰が誰から何をもらっているのかと、終始疑心暗鬼といった状態がうかがわれる。自分の知らないところで、誰かが自分よりも得しているといった猜疑心あり。ここに、横暴で出し渋りの父親との同一化がうかがわれる。そしてこの父親に隷従する母親に付け込む、‘不肖の息子’の居直りがありそうだ。甘やかされ放題への馴れ。祖父(寛容・権威なし)・父親(不寛容・権威あり)の齟齬を、そのまま彼が引きづっている。甘やかされた息子への父親の苦々しさ・反撥、批判的な眼。→<俺に内緒で、何喰ってるんだ！！>の牽制。<何も喰ってなぞいない(貰ってなぞいない)！>と、口の中が空っぽなのを舌出して見せてるみたい…。「空っぽ」の証明。←それが即ち、医師免許こそ取得できたが、依然として‘ペーパー・ドライバー’のままということに繋がるともいえそうか。

郷里に居た頃から、彼は或る寺の住職に私淑し、「座禅」に親しんできた。それも外的

規制をシャット・アウトする‘口実’ではなかったか。観念が枷となる。血肉化しない言葉。繋がりからはぐれる自分。そして観念に執拗に己れをシャット・インする。→それで「視線恐怖」という‘念仏’を唱えるだけ！其処どまり！つまりのところ、自分の仕掛けた罠に自分が嵌ってる。＜蹉かないと誰にも助けて貰えない＞、だから＜蹉けば、誰かに助けて貰える＞つもりでいる。だが、ここにも「自分が自分を助けること」を忘れていた盲点がありはしないか。この「野狐禪」の罠から抜け出し、いつ彼は＜イナイナイバア＞をする気になるものやら・・・。

■事例デッサンNo. 7.(1994/5/12)；

彼女にとっての「居場所」とは‘誰かの何か’になれるということ。結婚の形態もその一つ。＜私は私でいいんだあ！＞の保証とも言えそう。だが一抹の疑心・不安が拭いきれずにあるそうなの。ないものねだりをする私をずうっと諦めてきた。そして今、正々堂々と自分に付き合えるかどうか。母親を絶対泣かしてはならないというのが彼女にとっての拠りどころであったとか。それが生きがい、支え、そしてつかい棒。それで、‘いい人’をしてしまう。母親の自慢の娘。でも、所詮自分は‘借り物’。ではここで、＜それは自分じゃない！＞を＜それも自分だあ！＞に広げてゆけるかどうか、そんなふうに関係に付き合えるかどうか。これ迄外間・世間体を至上命令にしてきた。常識的に生きてきた。その至上命令を踏みはずせなかった。実際に社会的制裁に阻まれたというだけではなく、付き合いきれない→抱えきれない→手に余る自分がいるということ。そこから、葛藤を刺激する、‘非常識な部分’の自分に出番を封じてきたということになるのか。ここでそれらを整理してみようと試みるとしたら、そうすればしたで、これ迄の自分からの離反・裏切りになるのではないかという不安がありはしないか。究極には、「自分が自分であることの権利」が問われている。「誰かの私」なのか「私の私」なのか、苦しい選択になりそうなの。‘内側の要請’に忠実であることなのだが・・・。

子どもになれない子どもだった自分。＜わたしが我がまま言えば、すべてをダメにする＞という思い込み→だから我慢するお利口さん。そうして喜ぶ能力が殺がれてゆくわけで。自分が生きられてない、葬り去られてしまう内心の怯えあり。が、同時に、＜自分は、母親と(あるいは父親と)同じではない・同じにはなれない。違う！＞と脱錯覚することの心的苦痛。母親(ある部分父親)にすり替られた私が私を生きるのではなく、実は母親(ある部分では父親)を生きていたということ。そして自分以外の誰かを生きるのではなく、自分を生きることを受容すること。それが今・ここからの彼女の課題。自分を生きてはならない！という至上命令、その根拠を突き崩すこと。隷属ではなく、解放そして自由を希求す

ること。己れの中に「ナイ(欠乏)」を見据えること、それを「アル(充足)」へと変換させることが問われてゆく。そのためにも、いろんな出逢いにおいて「媒介」としての他者を認識すること。そして「(自分にとって)‘いいもの’との出会い」へ向けて、そうした関係が開かれたものになるか閉じられたものになるか、彼女が‘肝心要’を握っているはず。夫婦・親子の意味の問い直し。引け目・負い目は、むしろ繋がり合う芽を摘むことでしかないわけで・・・。

■事例デッサンNo. 8.(1997/7/25);

怒りが彼女の内側で絶えずくすぶってるようだ。そして、ぶつぶつと噴出して、こちらにも折々に火の粉が舞い散る・・・どこかで必死に自分の‘不毛感’と闘っているのだろう。その‘気概’を失わせることなく、だけど根っこに巢食う剥奪感のゆくえを見据えてゆくしかならう。巧妙に絶えず自分の不毛感是谁かのせい・・・といったストーリーが構成される。つまり「刺客」があちこちに潜伏していて、絶えずこちらの間隙を狙っているといった具合。もう一つ、「破魔矢」のお呪いで邪気払い。それでなんとかして不毛感を払拭しようとする。彼女の不毛感を母親に投影してるのか、母親の不毛感が彼女に投影されているのか、定かではないとして、いずれにしても「勝った・負けた」やら「盗った・盗られた」が絶えず繰り返されている。つまりのところ、‘刺客’なるものとは、そもそも自分の内側の期待外れといった鬱憤であり、その恨みつらみの意趣返しを外在化しているだけのお話。

つまりのところ、「境界 boundary」が問題となっている。やはり「越境してる自分」、それがいつでも問題になる！周辺の誰彼に、実は自分の‘越境者の部分’を投影してるからなのだ。越境者、つまりは‘お邪魔虫’、お騒がせの人！そんなふうに自分が自分を感じている。例えば、越境者という感覚を相手にそのまま投げ入れる。そうすると、自分は越境者だと相手に思われているということになるわけだ。自分を越境者だと思うことは耐え難い。それで、むしろ誰かが自分を越境者だと差別していると思ったほうが楽だろう。勿論差別する人は悪い人、あちらに非があることになる。私は悪くない、それで‘越境者である私’は相殺されるって結末。「自分が見たくない自分」は、そんなふうに始末される。相手の眼差しがまるでガラス球のように、こちらが秘かに心に抱くイメージが、そのままとかむしろ増幅された形で、反射してこちらの眼差しに映ってるだけ。

但し、‘越境者’ゆえの自分の値打ち・意味づけ・価値づけというのもある。<Girls Be Ambitious! (女子よ、大志を抱け!)>ということ。で、どこまでいっても‘越境者’でありながら、いつしか皆と同じ場所で生きていく自分を受け容れてゆけたらいい。時間がいつしか、自分を取り巻く境界を互いに遮断し合うギスギスした障壁ではなくて、やがて「共有する場」へと変容してゆけるかどうか。それも周囲の誰彼と互いの違いを許容しあうことで・・・。それも彼女の場合、大いに有りだなと思わせられる。

■事例デッサンNo. 9. (1998/6/16);

始終彼は、己れの中に、納得できないやらフィットしないといった違和感を抱えている。ジリジリと焦れている。すべてが漠然としていて、しっくり来ないんだとか。自分の感じが言葉に乗らないというのも悩みの種。<どうして深く味わえないんだろ・・・>と嘆く。「くれる・くれない、もらう・もらえない」など。それらの組み合わせもあろうが、すなわち、相手の‘意志’との付き合いに手間取っている。「相手にも‘限界’があること」を承知できないということでもありそう。つまり‘諦めさせられること’に我慢できないってこと。それも悪くない。憧れ、希求する思いが人一倍強いというわけだろうから。いい加減にとか、程々にとか、そんな‘ケチられること’へ反抗してるのだろう。それで、つまりのところ、何にでも、また誰にでも、‘ケチの付いたもの’にしてしまっただけかしら。それで、概して人との関わりへの意気込みがつい萎えてしまうことになりがち。おっかなびっくりの及び腰。何の咎めか、或いは鬱憤なのか。どうも明るくないのが気になる。屈託がつきまわっている感じ。これで心理臨床家ではまずいだろう。自分の出番はないと思いついて入っているみたいで。頼りにされていない、必要とされてもいないとか・・・。己れの‘力の見せ場’が分からないみたいな印象あり。「小さな弟」のまま。いつかはきっと「大きな兄貴」になるといった自己期待感はずっとゼロと言明する彼がいて、<不甲斐ない自分でご免なさい・・・>というのだけが残ったみたいな・・・。

彼には長兄がいたんだとか。一歳未満で肺炎で夭折している。次兄は3つ年上。妹もいる。この夭折した一番目の子どもの喪失、その心の躓きが家庭内を暗く覆っているような。ひっそりと静まり返っている感じ。寂寥感というか、特に母親の中で、「死んだ子ども」に気持ちが奪われていたということがあったかしら。お互いに「頼っていい・頼られていい」がない。そっちも寂しい、こっちも寂しい、それだけ・・・。「慰めること・慰められること」を求めない。「悦ばれたり、悦んだり」もない。一方通行。そして、彼は‘影の薄い’印象を身にまわってしまっている。おそらく生涯をとおして、<(自分は)生きていて良かった・・・>と口にすることが憚れていると思いついて入っているふうだ。「死んだ子ども」にはどうしたって勝てっこないわけで・・・。

<思春期頃になって母親に葛藤を覚え、あれこれ口論して、理詰めになると混乱して、その果てにブツンと何も無いところに取り残された感じになった・・・>と彼は語っている。これは示唆深い。この時期、なぜ生きるのか、なぜここに自分がいるのかと彼は大いに悩んでいたわけで。おそらく「生きること」が‘疚しさ’としか感じられずにいたのだろう。つまりのところ、子どもは成長するにつれて自立心が芽生える。そしていずれ巣立ってゆくわけで。それを母親の中で‘喪失’として内心懼れたということはなかったか。つまりのところ、「己れの意志を持つこと」を巡って、それが親に‘許されていない’といった不安が彼にあったのではなかろうか。「己れの意志」を形にしてゆくとは何だろう。その模索が、ここでの課題。それが引き

受けられるかどうか。例えば、バナナ欲しい？リンゴ欲しい？と訊かれて、ウンと頷く。でも本当に自分が欲しかったのはこれなのか、そうじゃないのではないかと疑問を抱くみたいなの。。<イヤじゃないんだけど、どちらでもない。。>っていうのがあるんだとか。自分に今ナイもの、「欠如」を埋めてゆくこと。これ迄、本当にお腹がすいていないのにいろいろ貰ってきたような。。ここで本当に「お腹がすくこと(欲しい!)」がどういうことかを知らねばということではなかったか。でもお腹をすかしている(欲しい!)自分を誰かの目に晒すことに躊躇う、困難がありそうなの。自分の中の「欠如=飢え」を知るとはどういうことかしらが問われてゆく。

ともかくにも自分の「本音」に向き合うことからしか何事も始まらない。それこそが彼の問題。騙し騙しでは「死んだ自分」そして「死んだ関係」を生きてるとは言えないか。まずは己れに「言わせてみる・聞いてみる」を試みてみてはどうかということ。「生きられなかった自分」がいて、それが「生きられる自分になってゆく」ことを選んでゆく。そこには「(自分に対しての)誠実」というものが問題になろうが、そこからおそらく彼のモヤモヤしたものが幾らか払拭され、彼に「しっくり感」とか「すっきり感」が感じられてゆくことが期待されよう。

■事例デッサンNo. 10.(2003/5/1);

その幼少期に既に「親を見限った子ども」というのは、なかなか逞しい(!)もんだと、いかにも逆説めいているけれども、それを実感させるものが彼女にはある。いかなる甘っちょろい幻想をも抱かない。<まあ、こんなものでしょ。。>と万事醒めた目で見ている。彼女の患者さんらはどうやらなかなかのツワモノ揃いで、つまり一般には「嫌われ者」とか「厄介なひと」たちだが、あちこち盪回しされて、今や彼女に抱えられている。患者たちにも、ここでなら自分が侮蔑のまなざしで見られることはないといった気安さがあるような印象。大したお手並みなのである。おそらく彼女にとって、「クライン派精神分析」の提唱している事柄など「綺麗ごと」でしかなかろう。例の「結合両親像」なんか特にそう。。

いつか誰かに<(あなたは)‘糸の切れた凧’のようだね>と言われたことがあるんだそうだが。確かに帰属意識は希薄。この場合も、「切られた」のではなく、「(自分から)切った」というのがある。<わたしの都合は、あなたのに合わないの。ごめんなさい。。>とすらっと相手をおかわせちゃう、そんな神経の凶太さがある。時としては気儘で横着な振る舞いをする。内心では自分は「罪悪感の塊」なんだとかおっしゃるけれど。でも、なかなか口にするのを憚られるような相手の弱点をもズバツと言う。それで仲間内で「口が悪い」との評とか。それも「確信犯」的とも言えて、なかなか羨ましい性格と思われる。心理臨床家としては珍しい人物である。

それが何かのきっかけで、本来ご縁のある筈のない私のもとに「迷い込んで」来た。そしてまるで「地獄の釜の蓋」を開けたみたい具合で。。総じての印象は、「口がしっかり吸えない」。

母親の与える乳首をしっかり掴まえない子どものようなのであった。欲しがることは、負けを認めることのような、つまりそういうこと。＜劣勢な自分はいや！＞というわけで、飽くまでも優勢でありたいとしたら、どうする、どうなるかな。＜私は欲しくない。要らないもん。欲しくないもん。欲しいのはあなたでしょ・・・＞をやってるわけか。ここから、解られること・解ること→知ること、そして関心・興味を持たれること→侮蔑・侮りに堪えること。→そこでそこから興味を逸らす。そして「論理→詭弁」となる。さらには、「疚しさ」を隠蔽する。「不実」というものが温存されてゆく。興味を持たれることのタブーから、方向感覚が曖昧、無頓着・無感覚。感受性鈍いといったことが挙げられる。権威に対しては角突き合わせ、もしくはおもねりやら。何しろ‘怖いもの知らず’だから、対人交渉術は卓越している！

深く愛着を持たないのが信条としてあったとか。情が移ることはある。でも心酔はしないとか。結婚しても、自由になれていない。勝手に縛られている。それで‘遊牧民’みたいな・・・でも、いい出会いがなくもない。うまく繕っているし、それで中身は問われない。が、内側は‘腐乱’しているんだとか。つまりのところ、その関係性に於いて、‘侮蔑’が勝利しているのだろう。ただのお手並み拝見。要らぬお世話。有難迷惑。そして最後、＜おまえには任せられん！＞になるんだろうか。

子ども時代の病歴として「夜尿症」の記憶をひきずる。‘ダメな子ども’。でもこれがまた、或る意味で「子どもはサーヴィス業!」の実践編とも言えるのだ。母親は、仲間内では「校長先生」と綽名されていた、いわゆる「級長タイプ」とか。万事誰もが一目置くところの‘仕切り屋さん’。とても逆らえないわけ。だから彼女と付き合うとしたら、むしろ「ダメな子ども」になっておもねるしかない。お追従ってこと。或るとき、友達宅にお泊りに誘われ、母親にオネショを理由に止められた。そのことからオネショがびたつと止まったんだとか(憤然として止めたわけ!)。＜あの時、母親を見限った。もう付き合いきれないと・・・蹴りを入れた！＞と彼女。これはいい！本来は優等生という二重の意識があり、自己卑下と居直り(開き直り)。だが、自己懐疑的なまなざしの虞と化している感がある。奇妙に聞こえるが、＜親を親らしくさせてあげられなかった＞という子ども側の‘悔い’を彼女の中に見る。彼女はどうかやうクリスチャンらしいが、どこかで、＜親を見捨てた・見限った己れの罪(そして頑迷さ)＞を今尚も引きずって、だから誰彼に対して(特に心理臨床に於いて)支援的 helpful であろうとする。償い・埋め合わせとして・・・彼女の女性患者の多くが、親への執着やら愛着・未練ゆえに自立できず人生を潰されている。だから、＜(親に)蹴りを入れた！＞彼女からガッツを得て、もしも人権意識の目覚めへ向けての‘共闘’が図られるとしたら、実に得難いわけで・・・彼女は、小学校の折に＜人の気持ちを分かる人になりたい＞と作文を書いたことがあったんだとか。初志貫徹ということになる。この彼女の中の「願掛け」をぜひとも信じたい。

[2020/11/01 記]

【参考図書一覧】

・ロダン(1840-1917);

「ロダン言葉抄」 高村光太郎訳 高田博厚・菊地一雄編 岩波文庫 1960

「ロダン事典」 監修・フランス国立ロダン美術館 淡交社 2005

「ロダン—神の手を持つ男」 エレーヌ・ピネ著 高階秀爾監修 遠藤ゆかり訳
創元社 2005

リルケ、R.M. 「オーギュスト・ロダン」論説 講演 書簡 塚越敏訳・解説
未知谷 2004

リルケ、R.M. 「リルケ美術書簡 1902-1925」 塚越敏編訳
みすず書房 1997

・西田幾多郎(1870-1945);

「芸術と道徳;西田幾多郎全集 第3巻」 岩波書店 2003

・高村光太郎(1883-1956);

「定本 高村光太郎全詩集」 北川太一編 筑摩書房 1982

「高村光太郎 造型」 吉本隆明/北川太一編 春秋社 1973

「美について」 筑摩書房 1985

「芸術論集・緑色の太陽」 岩波文庫 1982

WEBサイト「青空文庫;高村光太郎」/「回想録」等。

高村豊周著;「光太郎回想」 日本図書センター 2000

高村光雲著;「幕末維新懐古談」 岩波文庫 1995

「高村光太郎」(新潮日本文学アルバム8) 新潮社 1984

吉本隆明著;「高村光太郎」 講談社 1991

駒尺喜美著;「高村光太郎」 講談社 1980

・荻原守衛・禄山(1879-1910);

「彫刻真髓」 中央公論美術出版 1978

仁科惇著 「禄山・32歳の生涯」 三省堂 1987

林文雄著「荻原守衛 忘れえぬ芸術家」 上下 新日本出版社 1990

・高田博厚(1900-1987);

「偉大な芸術家たち— ロダン、ブールデル、マイヨル」 講談社 1967

「思索の遠近」 読売新聞 1975
「ルオー」 高田博厚/森有正共著 レグルネ文庫 第三文明社 1990
「分水嶺」 岩波書店 2000

「片山敏彦著作集第6巻・青空の眼」(P.218-225「高田博厚について」)
みすず書房 1972
福田真一編;「高田博厚— その内部における東西の遭遇」 爛乎堂 1984

・尾崎喜八(1892-1974);

WEBサイト(ozaki.mann1952.com);【詩人尾崎喜八】
文集/「高村光太郎」、文集「音楽への愛と感謝」/「高田博厚との出会い」、
詩集/「空と樹木」1922、詩集「旅と存在」1933、
尾崎喜八資料16&17「尾崎喜八と高村光太郎」他

・本郷新(1905-1980);

「彫刻の美」 中央公論美術出版 1980
「本郷新記念札幌彫刻美術館」カタログ 求龍堂 1981
「本郷新彫刻展」カタログ 求龍堂 1984

・柳原義達(1910-2004);

「孤独なる彫刻・柳原義達美術論集」 筑摩書房 1985
「孤独なる彫刻—造形への道標」 アルデヴァン 2020

・その他;

「土方定一著作集12・近代彫刻と現代彫刻」、
(P.85-298)「高村光太郎」 平凡社 1977
土方定一著;「岸田劉生」 日動出版 1971
「日本彫刻の近代」 企画・監修;東京国立近代美術館/三重県美術館/
宮城県美術館 淡交社 2007
「マイヨール」 氷見野良三著 グラフ社 2001
「マイヨール展カタログ」 編集・発行;山梨県立美術館、
兵庫県立近代美術館、東京新聞 印象社 1984

■補記： 或る男子の「セラピー全過程」のデッサン覚え書

「附・折ふしの記」の事例デッサン帖をご覧になられて、それぞれにここから「治療プロセス」がどのように展開していったか、おそらくどなたもご興味を抱かれるかと思われまふ。誠に「終わりなき分析」(フロイト)とは言え、「精神分析的リアリティ」を窮めてゆく中で、われわれは何を目指し、どこ迄‘知るこゝと’の可能性を夢想し得るものでしょうか。

ドナルド・メルツァーは、彼のお気に入りの著書『The Psycho-analytical Process』(1967)[邦訳：「精神分析過程」金剛出版 2010]に於いて、児童臨床の展開プロセスの理論構成を試みた。クライン流の「子どものセラピー」そして「展開をどう読むか」といった観点からしてその試みは野心的で、実に画期的なもの。「精神分析的リアリティ」を徹底して探究しつつ、分析的状況の今現在に刻り込んでいる。とても含蓄のある書物なのだ。だが、臨床素材は、メルツァー自身のケースやら彼の豊富なスーパーヴィジョンの経験のあれやこれやを網羅したもので些か雑駁な印象は否めない。分析的プロセスの自然史なるものを‘個々(individual)’の成長の証しとして俯瞰する視座に欠けるのが惜しい。

さて、それを補う意味で、ここに【症例タカヒロ】を掲載する。或る一つの症例に的を絞って、その詳細な「セラピー全過程」の素描を試みたものだが、メルツァーの著書に彩りを添え、いっそう面白く読まれるためにも大いに寄与するものとする。私がスーパーヴァイズした或る男子〔治療開始当時11歳、診断名：軽度自閉症〕のセラピーの症例であります。2年4ヵ月間のセラピー終了後の2003年、私はその歴大な量の臨床素材を跡づけ、全過程の流れの‘素描(デッサン)’を試みた。ここにはビオンの表記する図式【Ps←→D】が実に生き活きと脈打っている。すなわち、「Commbined Objects (結合両親像)」を‘中軸’としてその変容展開の流れがそのままタカヒロの成長の証しともなっている。「心」がそれ自らを形づくってゆくさまに立ち会ったという意味で、セラピストの梶川和行氏、そしてスーパーヴァイザーであった私の双方にとって大きな感動を呼び起した。こんなにも我が日本の「セラピーの子ども(!)」が奮闘した。実に誇らしい！帰国後児童臨床に携わることのなかった私にとって、クライン派精神分析が我が国に根付いてゆく手応えを得て、大いに自信ともなった。あの当時、梶川氏は京都大学教育学部・大学院・修士課程に在籍していらして、<・・・心理治療に明確なビジョンを持たず、どう治療を導いていったらいいか・・・>と深く煩悶され、それで私のもとに2000年9月以降お越しでした。それから幾歳月を経て、梶川氏に直接手渡しただけの、この未公開の<タカヒロの素描[デッサン]画>が懐かしく思い出され、ここに手直しすることなく、「解説」も付けず、そのままを掲載した。ぜひここから「精神分析的リアリティ」を感得されたい。最後に、梶川和行氏に感謝を捧げます。

[2020/11/05 記]

◆症例:タカヒ口◆ —セラピー過程での内なる「combined objects(結合両親像)」の変遷—

(A)paranoid-schizoid position・・・paranoid anxiety&persecutory pain・・・「combined objects」(bad intercourse/強奪・搾取/侮蔑) ← 嬰兒殺し

(B)depressive position・・・depressive pain・・・「combined objects」
(good intercourse/思い遣りconcern&規制/憧れ) → 同胞愛

※主眼点:(A)→(B)への変移の兆しdepressive pain の擡頭に留意。

#23 殺人鬼の自動ロボットと化すタカヒ口。執拗な死闘の繰り返しの中で、内に取り込まれた「親像」はすべからくその子どもら諸とも糞まみれの異臭を放つ残骸と化す。いわば内的部分対象・悪辣非道な父親penis(=babies)は共喰い状態。(←4歳頃までの遺糞・遺尿との関連。)この場合の‘痛み’は他人ごとで、自分ごとには決してならない。<痛そう・・・痛かったやろなあ・・・死んだら痛くない。・・・>

#28 それでも折々犠牲者の痛みには彼自身が触れる時もある。<誰か、ひと、助けて下さい・・・助かった・・・生き返った・・・。> しかしその痛みが自分のであることを頑強に否認。<痛くて笑うしかない・・・痛すぎて笑うしかない。・・・>

#36 内なる「combined objects」は裏切り・背信そして猜疑心に彩られ、かつ無価値化された木偶でしかない(去勢された父親ペニスと八つ裂きにされたオツパイ母親と・・・)。そうした彼らの bad-intercourseが生み出す‘次の赤児たち’は必ずや死を免れ得ない運命にある。彼タカヒ口にその責任ありとし、自らが‘罪人・咎人’という逃れようのない刻印を背負い、もはや痛みは他人ごとではなく我身に→‘自殺’。#38 <自分の顔に墜落・・・。> 自責の念。

セラピー・セッションの時間の規制→受容そして安堵。<終わりがある。休みがある！> 無思考なmindless 殺人鬼ロボットの執拗な攻撃も一時中断。<止めて！・・・助けて！> 思考力の回復。そして他人の痛みと自分の痛みとの付き合い。#42<おまえらに俺の痛みがわかるか・・・おまえも痛いけど、俺ももつと痛かったんだ・・・。> ゴツホとの同一視。その不遇な彼の人生に思いを馳せる。痛みは彼のでもあり、タカヒ口のものでもある。絶望と救済を巡って、折り合いを付けようとするタカヒ口。<強く生きろ、悪いことはみんな忘れて、いいことだけ思って生きろ・・・。> ゴツホの死を悼んで、<始めたばかり、これからなのに・・・>と慨嘆の声。人の心の痛みには我がこととして寄り添うタカヒ口。そして梶川先生と一緒に寄り添ってくれてもいるという気付きの芽生え。<気持ちの中では会っている・・・でも気持ちの中だけや・・・。>

#43 ホワイトボードの利用。〈あの白いのを使うか…〉←白いおしめ・オッパイが糞まみれのオッパイになることの迫害的恐怖から一步脱出を遂げた?! そしてそこには‘憧れ’(good-objectsの希求)が…! →「滝の絵」をどうにか完成させる。描く過程での彼のつらそうな顔に注目! ←depressive pain。〔滝を目の前にして4人登場。一人(母親像?)がパラソルを手に…。この‘家族’の周りを四角い柵で囲む。〕その後、4人の怪獣が現れ、散々にその絵をこき下ろす(depressive position→paranoid-schizoid position)。脱価値化(→‘自殺’)。それでも尚「価値あり」とする生存への闘い。〈守らな……。〉かくして二つの心的態勢 position そして二つの痛みpainが行ったり来りの心的格闘…。→絵画『太陽の夜』そして『山と川の道』。〈やっと分かってもらえた…。〉

※着眼点:ここに至って、母親オッパイはもはや空疎で腑抜けなそれではなく、乳首(父親ペニス/時計・パラソル)を具備している。かようにしてcombined objects(good-intercourse)へと彼の心の舵は向けられた。それがどれほどに‘つらい(depressive pain)’ 道程であることか!

combined objectsを巡っての執拗な現実吟味。→父親ペニスの介在への不信・猜疑心の高まり。←占有欲の断念。→エディプスの葛藤。並行して自立路線へとステップアップ。(#45 単独での来所開始。) タカヒ口の人権意識の芽生え及び「育てられる」ことへの希望は、迫害的懲罰的な bad-penisとの闘いに収斂されてゆく。combined objects の結束の深まりは同時に彼を敵に回しての彼らの結託そして謀殺の危険性を孕むことに…。→親の生殺与奪の権への疑心。 #45〈殺すの止めろー!〉 父親ペニスのpotency、それは即ち「同胞(次の子供)の誕生)を孕むが故に警戒されかつ憎悪される。→彼自ら生殺与奪の権を行使。その結果は… 〈みんな殺した…俺は何をやってるんだ…一人ではさみしい… みんないた方がいい。みんないたらさみしくない。これからだ…。〉 combined objects は尚も不信に彩られ、依然として脆弱かつ無能無策。 #46〈ゴッホの母は暗殺され、父は熱病で死ぬ…。〉 ←羨望。脱価値化。かくして子供らの運命は風前の灯。流産? 中絶・墮胎? ←絵画『星の流れの道』 救済策は同胞葛藤故に虚しくも破綻。〈守らな…! (自殺)止めな…〉→ゴッホの死、そしてゴーギャンの悲嘆。もはや「ダメな小さな弟」ゴッホではなく、「タフな兄貴」ゴーギャンに同一視するタカヒ口。そして再生のチャンスを狙う。←絵画『家から山へ登る道』 だが、‘ヒトラー悪鬼’の誕生で妨害阻止の憂き目に遭う(←ユダヤ人撲滅作戦?!)。かのように combined objectsの子供らを抱える能力即ち ‘concern’ は無益かつ無力極まりなし。

combined objectsの絆・結束の強化は、即‘放逐’の危機へと…?! その疑心故にエディプスの状況は苛烈さを増す。自己憐憫と感傷を募らせる。仮想敵なるcombined objectsの

迫害・蔑視・嘲笑に拮抗せんとして、‘侮蔑’を武器に応酬。逆襲は青年期的抵抗であり、更には異性愛へとステップアップ。「我が闘争」は始まりぬか！？ #49 <うるさい、俺の絵だあ。なめんなよ…><樋口一葉は味方…> 己自身のgenital potencyに対して期待感と悲観が交錯する。絵画『可愛い女性、木がいっぱいのいろんな色』<…石川啄木、25歳の若さで早死、病死。21歳でせつ子と結婚。19歳！6年しか…(絶句)>

combined objects の耐久性が疑問視される。消耗・衰弱の懸念。賞味期限ギリギリか？！→疎外感・孤独感・矮小感を募らせる。両親像は侮蔑に彩られ、老朽化して使いものにならぬ代物。→#58 永井龍男、曾根綾子の死。お邪魔虫、だからポイ捨ての運命か！？ 見捨てられ不安とその恨み、さらには同胞葛藤が沸騰点に、‘復讐鬼’さながら…。#59 <痛さなんか、わからへん…> <辛い、苦しい…>の連発。

一方で、性愛化の強まるcombined objectsへの対抗策として異性愛への傾斜。誰かと自分が‘pair’になれる！？「妹なるもの」への思慕。#66 <おとなじゃない、子供の女の子じゃないと…。> 更には、侮蔑を梃に(!!)オッパイ母親は勿論用済み、bottom・genital母親への未練も払拭。母子相姦の誘惑の回避。<お母さんもサルもおってもしようがない…。>

エディプス葛藤の解消へ向けて試行錯誤。青年期的反抗。→離反の自由、迷子になる自由を満喫しつつ、「親との絆へ立ち還る」といった新たな取り組みへの挑戦。#67 68 &69 両親を試し、梶川先生をも試しといった繰り返しの中で、来室を自分自身の試練として引き受ける。<何で道具ない。時計と地図がある…。> <もっと頭使ってこな…。> この場合の腕時計と路面図は、combined objects(good intercourse) の象徴。即ち、それはタカヒロにとって、誰かの子供であること、育てられ導かれることの権利を保障するもの。さらにはタカヒロが希求するところのおとなになることへの親の赦し・同意をも内包している。 →「親面談」

エディプス葛藤の新局面。同性愛傾向募る。鉄面皮的父親ペニスの取り入れ。タフな‘外の子供→大人の男’へ向けての前進。母親(&‘内なる子供’)は疎外・排斥され、‘邪魔者’扱い。二者関係から三者関係への移行の蹉き。#74 <生きているのは俺と父親二人だけや、みんな死んでしまう…。><母親に)会いたかった。二人やったら殺されへんかった。 覚えていたら生きてた…。>健全な Splitting(分裂)の強化。→上の階が「指導室」、下の階が「工作室」。だが‘地下の殺人’はあちこちに波及。←母親の‘内なる子供’への憎悪の沸騰。無差別テロ的嬰兒殺しへと発展。

孤立感・疎外感→‘仲間・友達’の希求。#75<喋りたい、喋りたい、喋りたい、話したい、話したい、話したい、会いたい、会いたい、会いたい…>だが応答は圏外で雑音のみ。アクセス不能。←combined objectsの絆・結合への不信感。→「Attacks on Linking」 #78 <近いのに通じない、近いから両方とも殺されてしまう…> →孤独感。<話せる人いなくなってしまった。また、cold sleep。一人で冷たくなって寝ているだけやんか。凍って。なんでやあ…> →mindless・thoughtless。<頭、爆発するしかないわ。爆弾…> →狂気のふり。心の隠蔽工作。#79 <あんまり(夢)見ない…記憶ないなあ…>

※**着眼点**:「Attacks on Linking」がタカヒコの裡でしばしば苛烈さを持つ背景に、小学校入学直前に母親がジストニア、父親が網膜剥離で入院、そのため弟と一学期間施設に入所という心的外傷体験が考慮されよう。

genital potencyに向けて、自慰・性衝迫の猛威。#79 男女人形の暴力的性戯。→去勢不安も苛烈に…。#79 <サメに噛まれてばかり、銃で撃っても手を噛まれやられてばかり…> #81<エレベーターに乗った途端、プチョって首切られて死ぬ…> →大人(一人前の男)扱いにされることの怖さと子供扱いへの悔しさと…。←ゲームの『体験版』しか与えられないことの鬱憤。虚無。negativism。腑抜け。→#81&82 受付のベルを押せないタカヒコ。#81 サッカー:片方のチームが一方向的に攻めるだけで、守りの人形は寝たままの恰好!! #83 <出来るわけがない…>

自慰性衝動及び自慰空想masturbation fantasyとの内的格闘。→思考抑止inhibition #83 「箱庭」も手詰まり状態。<置いてられへん…> #85 <頭、燃えてしまう> <お前は禿だ…お前は醜いんだ…> そうした熾烈な内的現実と外的現実の間にバリアー設置。#84 <これはドラマ。現実にはこんなこと、起きひん。起きたら死刑や…> 尚も責任持てないといった懷疑の虜。→#87<ゲーム・オーバー。何でやあ…もつと続きあったのに…> 去勢不安はtoo real!! 青年期的懊悩。→combined objectsはいつそう性愛的様相を増す。娼婦・売女的genital母親と誹謗中傷し嘲笑的な父親ペニスと…。#85 <ジプシー女をつかまえる…> そして殺戮の修羅場。#87<修行が足りんと言われる…お前はダメだと言われる…> →不毛感 #89 <そんな言っても無駄や。「そんなもん知らん、勝手にしろ」と言われる、お父さんに…>

破壊性と抑止力のバランス。‘ストッパー’としての父親ペニスの取り入れ同一視。#89 サッカーゲーム。梶川先生がgoal-keeper。→自慰と性交の違い。思うこと thinkingと行動すること

acting-out の違い。現実吟味。limit(ここ迄！)の設定。同時に<俺を男にしてくれ！>のタカヒロの心の叫びへの応答・赦し(いいんだよ！)が希求される。→combined objectsとの「Linking 絆」の修復へと…。 →「母面談」

「償いreparation」即ち combined objects との Linking の復活が頓挫。自慰→去勢不安からくる inhibition 制止が顕著。#92 <やることない…> 絵画:『両手のない人(stick-figure)が台の上に乗っていて、橋のようなものの前にいる』←combined objectsからの応答・赦しがない。 →依然として手も足もでない、つまり心理的去勢・凍結状態。

「救済のテーマ」→combined objectsとの Linking・絆の回復とは即ち、combined objectsと彼らの‘内なる子供たち’の安寧wellnessを保証すること…。 →#93「病院」殺戮への逡巡(‘抑制’)、悔い改め、思慕の念が…！！‘内なる子供たち’の死か安寧か、ここで改めてcombined objectsの concern(思い遣り)が試練に遭う。つまりは、‘殺人鬼・タカヒロ’とcombined objects(good intercourse)との対決。他者の‘痛み’に触れる→人が人を求める。そうした絆・繋がりへの回復が目指されている。#93 人形劇:<ローラ、何か起こっているらしい。気をつけてくれ。パーカーの所に行ってくれ。> パーカーのところへ行くローラ。倒れているパーカーに近づいては遠ざかり、言葉はない。(絶句)… //女性人形:<どこ、ここは？デビッドに会いたいわ…> 緑の服を着た青年人形をこの女性人形と一緒にさせる。そこに犯人の人形も接近…。ここで「体験版」ということで、物語りは尻切れトンボ。combined objectsの修復restoration(償い)作業は困難を極める。おっかなびつくりの試行錯誤。そしてついにcombined objects の蘇生が！！ →絵画1:『2両連結のトラック、ドラム缶&運転手』 絵画2:『ヨット、川そして家々』 絵画3:『モンゴルのお城、二人の人が両手を挙げて万歳のポーズ』 タカヒロの苦しそうな、しんどそうな面持ちに注意！

←depressive pain。大きな心的代償を払っての破壊性(我執)の relinquishment 断念を達成！！ ブラボー！！ 一山越えた？！

combined objects(good intercourse)の賦活、そしてその取り入れ同一視は、タカヒロ自身の活力の蘇生にもつながる。 →心的なpotency(competence)への期待感募る。 #94 ゲーム『めざせ大関』<今日はモンゴルへ行きたい…今度は中国へ行きたい…> 小さめのジャンボジェットの飛行。 →アジア地図作製。領土と国境→相互に不可侵であること →秩序と平和の維持。だが油断は禁物、ちよつとキナ臭い？ ←genital potency (competence)の見積もりと現実吟味。改めて青年期的エディプス葛藤。 →力の序列をめざしてのpower-battle。大いなる者(父親ペニス)対‘挑戦者’タカヒロの対決。ことごとく敗北。 #94 緑の青年、黒服、そして仙人のような老人。それぞれが対戦相手。黒服の勝ちで、<修行が足りん…>と勝ち誇る。さら

に老人の勝ち、<ハッハッハ、甘いな・・>と嘲笑。若輩者タカヒロ。歯が立たない悔しさ・鬱憤→
#95 殺戮ゲーム。→<俺はなんていうことをしてしまったんだ・・> ←もはや破壊欲衝動に耽溺することはない？ 何故ならば、ここに至ってタカヒロの眼目は、父親(ペニス)を殺傷し、己の力を誇示することにあるのではなく、己が一目置かれる存在として認められることにあるのだから・・。青年期的エディプス葛藤の解消とは、父親(ペニス)からの認知と赦しが必要条件・・。勝敗よりも相手してもらったあという手応えがポイントか！？ #95 大きな豹:<よくここまで来たなあ・・グッダー・・> タカヒロ、この豹に挑戦、だが彼に勝ち目なし。豹が勝利に高々と腕を上げる！！→勝ちを譲った？負けて安堵か？！→笑い(苦々しさと清々しさと・・)。←断念 relinquishmentの報償 rewardは、combined objectsとの絆・連帯への‘奇跡的生還’を遂げたこと！！

combined objectsを巡って、さらなるwork-through。羨望envyによる攻撃と償いrestorationと・・、つまりはcombined objectsの瓦解と建て直しと・・その行ったり来たりの内格的闘。ここでの眼目は危殆に瀕する‘母親の内なる子供 inner-child’の救済。#96 <子供がいない・・！> さらに女・子供らが銃撃を受けて惨殺。犯人:<「なんていうことをしてしまった・・殺すだけじゃ・・ぼーっとしているだけじゃあ・・」> →冷酷非情なタフガイ路線。殺るか殺られるかの武者修行矮小感と孤独の淵へと・・。→キャンプ体験を経て、「誰かと一緒！」の希求。#98 「チーム・バトル・ウオー」梶川先生とのパートナーシップの強化。←キャンセルの電話連絡を巡って、自己責任の促し。→シニシズムcynicism・ニヒリズムの陥穽からの脱却へと・・。#99 人形劇。ローラとキンバリー:<やっと会えた。きっとコールド・スリープから目が覚めたところだ・・> 再会を喜び、抱き合う。<この地球に何かが動いている・・。> ロニーの死体確認。<あっ、ロニー。なんてひどいこと・・。> 尋ね人・ジョージは死亡との返答あり。さらにデビットに連絡。以前繋がらなかった電波は回復し、応答:<ローラ、ここにいたのか。よくここまで来られたな。そうか、君から電話したことは殆どなかった。そうか、俺のこと分かったんだな。ローラ、さっきは(ごめん)・・。> ローラとキンバリー:<ただけど、こんなところで溜息ついてもうどうにもならない。ロニーは死んだ。しゃあない。私たちが、生活しなしゃあない。死んだものは仕方がない・・。> 冷酷非情な鉄面皮→柔らかな皮膚(即ち彼の中の‘女の子・妹’)の蘇生・・！！ #99<寒い・・。> #100 <キンバリーがいたら良かった・・パスワード、教えてもらえへん。電源つながらへん・・。>

combined objects(good intercourse)の緊密な連帯・絆の取り入れ同一視。それは即ち、「どの子供も決して死なせはしない、生かしてゆく」、そうした両親の結束で固められた決意 concernに呼応する‘責任意識’の芽生えの促しともなる。→母親及びその子供らを‘擁護する者’へと「殺人鬼タカヒロ」の変身(改心・悔い改め)がここで問われてゆく。その前提条件として、母親オツパイの断念relinquishment、並びにbottom・genital母親との訣別が必要不可欠・・。→#

100 「乳母車」と「病院」、「十字架」と「マリア像」。// <女の人とマントの男の戦い。そして女
人は二度吹っ飛ばされる…。> →‘次の子供’に母親の委譲を果たしたということ?! かくして彼
の‘内なる母親’は、思い遣りながらも彼を見守るだけの存在として、心の背景に退けられてゆく。
ここに至って、青年期的エディプス葛藤は一応の終焉を迎えてゆく!? →#102<何人殺し
てるねん…。もうこんなの、やってられへんわ…。>

combined objects(good intercourse)との強固な絆は「container」と「contained」との緊密
な関係を約束・保証するもの。→仲間或いは味方、即ち「護られねばならない!! 誰か・何か」
の存在の気付き。→「同胞愛」の目覚め。但し、尚も同胞葛藤が混在し、さらには同性愛と未だ
危険視されている異性愛とが交錯し、混沌としたhelplessの状態。 combined objects(good
intercourse)の絆 Linkingは 危殆に瀕することに…。 →無為無策かつ不能impotentな父
親!! #101 人形劇:<パーカーはもう死んでる。なんで、もう。俺はキンバリーの恋人を見捨
ててしまった。馬鹿や、俺…。> //<お父さん、何ぼ一としてる。俺の味方、死んでる。どうし
て助けてくれへん…。> //キンバリーがローラのところに戻って<さっきはごめんなさい。けどもうい
いんや。もう仲間なんかいいんや。こんなところで溜息ついててもしょうがない…。> 最後は、
ローラの投身自殺で幕切れ。→異性愛の期待・憧れが尻つぼみ。異性への侮りと不信とが濃厚。

→「母面談」:父親批判!! ←#102 人形劇:女の方は男を踏みつけ優勢。女の人
が勝って「フン!」と言う。←賦活された女性像?! 女は度胸??!! →combined objects
(good intercourse)との絆・同盟が賦活され、genital potentな父親の登場!? →その撮り
入れ同一視が心理的去勢状況との闘いへの牽引力。 →#105 サッカー。絵画『チームの旗』
そして応援歌:<走り続けろー。果てしなく続く道がある。どんな時もあきらめないで。希望をも
ち続けよう。(…) 耳をすませる。みんなの声が導いてくれる。Vゴール。飛べ。信じていれば、
かなうはず。人生を捨てないで…。!!>

※着眼点:この時期に、同胞愛が同胞葛藤によって尚も執拗に阻害される(←paranoid-schizoid
positionへの後退setback)といったタカヒロの苛烈な心的格闘の背景として、彼が月1回通
っていた「療育センター」の担当の女性心理臨床士が妊娠していて、産休を間近に控えていたと
いう事実を重ねてみると興味深い。→タカヒロが<彼女を好いていた>との母親から証言あり。
→異性愛の目覚め、憧れと困惑とがより現実…。>

青年期的自立を目指して…。combined objects(good intercourse)が、タカヒロのparanoid
-schizoid position への後退に拮抗する歯止めstopperとして、より懲罰的な厳格さを募らせて
ゆく。その取り入れ同一視は困難を極め、悲愴な趣きに…。 [サッカーの降板、選手交代→

墮胎・放逐！！] →combined objects との Linking 絆が再び危殆に瀕する羽目に……。#106 負傷退場、ファウルによるレッドカード退場。<レッドカードくらいではすまへん。もっとや…ブラックカードくらいいってるな…。> #108 審判がカードを出す。<イエローと思ったらレッドです…。> #109 審判がレッドカードを掲げる絵。<ファウル厳しく取りました。サッカーではなくてしまう。サッカーとしてはおかしい。これで、イエローではすまない…。> 並行してcombined objects(good intercourse)の内包する「規律・規範・信義」といった側面の摂り入れが促される。 #106 キャンセルした日に連絡無しに来室。タカヒコの契約違反。梶川先生との間での契約の順守を巡って取り決めを…。→#107 次のセッションを熱出したからとタカヒコ本人からキャンセルの電話連絡あり。

青年期的自立。その基盤となるのは、combined objects(good intercourse)の公平さ fairness・誠実さsincerity・寛容tolerance、そして強靭さresilienceの摂り入れ同一視。さらに、内なる親たちへの信任・恭順・崇敬の念が、帰属意識・仲間意識・同胞愛、そして「心の安寧」の礎石。→combined objects(good intercourse)の絆・結束 Linkingがタカヒコの心の裡で改めて試される。[←#109n いずれのセッションも腕時計を置き忘れたタカヒコ！！] combined objects の「container」としての力量とは、どの子供をも平等に抱えんとする、その決意にある。ヨシツ！と鼓舞する父親、そして思い遣りをもって見守る母親と…。タカヒコにチャンスはあるのか、出番はあるのか…？？奮い立つ気分と萎える気分と…。→#106 <なんやねん、それ！男だいなしゃ！> #107 <がんばれよー。退場、それくらい何やねん。それで終わりかよ。がんばれー…> //ゲーム『めざせ大関』: ‘土俵’の力士、幾度も土俵下に転がり落ちては再度くレッツ、ゴー！> #108 <マリア、どんなに悲しんだことか…。> #109 <こんなこと思ったら、もう応援してくれる人が…いなくなる。> //他の選手の人形を掲げて、<ナイス！！> #110 <監督、よく見てる…> #111(最終回) 人形を立たせようとする。が、うまく立たないで倒れる人形に向かって、<しっかり立てよ…！！> //人形を刺殺:<グサッ…残念ながら終わってまあおうか。すまないな…いつかは終わらなあかん…。> かくして梶川先生に見送られ、タカヒコは一人傘さして雨の中へと…。まるで仁侠‘男の花道’?! 翌週連絡もなしに訪れたのは、梶川先生の安否を[転移上は、‘内なる母親とその子供たち’の安寧を]気遣ったのことか?!「総てがアル！」ことを確認して、<こんなところでレッドカード出してられへん…。> と言った後、涙と握手で「別れの儀式」を終了！！ →「親面談」: ‘率直さ’の勝利！！双方共に感慨無量！この面談が、タカヒコの裡のcombined objects(good intercourse)のさらなる挺入れになったであろうことは疑いの余地がない。ウルトラC的快挙！

Congratulations！！

[2003/3/21記]
